第 17 回日本在宅医学会もりおか大会　**一般・指定演題**

（実践報告）抄録用紙

演題名 （全角 80 字以内）	廃用症候群の患者に対する作業療法士アプローチと看護の連携
演者名	ガルシア小織、大石徳子、小山章子、矢神愛美
所属	訪問看護ステーション　メディケア

〈はじめに〉

在宅における作業療法士（以下 OT と表記）の介入は、日常生活と身体機能の維持向上をはかる意味では重要な役割と考える。当ステーションで援助している廃用症候群、気管切開、胃婁装着利用者のアプローチと看護との連携の重要性を報告する。

病名：くも膜下出血、急性腎不全、慢性腎不全、慢性気管支炎、慢性肺気腫。６７歳男性。急性大動脈解離、急性下肢動脈閉塞で入院。術後腎不全、肺炎、心不全など合併し、気管切開。栄養状態悪化、離床進められず臥床傾向となった。基本動作、ADL とも全介助レベル、リハビリに対して消極的。廃用症候群で在宅へとなった。

退院直後、週１回の看護師のみの訪問で援助。家族より「寝たきりにさせたくない」「お父さんと一緒に行きたい所がある」との希望が聞かれ、ケアマネへ報告。当ステーション OT による機能評価を行いその後、週２回の OT 訪問となる。

〈援助内容と経過・結果〉

OT アプローチ：下肢の拘縮強く、端座位保持は後方へのバランス崩しやすく常時介助必要。姿勢反射はみられていた。保持する程度の耐久性、体幹支持性は低下。下肢の可動域向上に取り組み、徐々に端座位保持に必要な可動域が得られ、随意性もわずかに向上。それにより端座位保持は徐々に介助を減らし、現在は柵やテーブル等につかまり１０～１５分程度可能となった。その後車椅子導入し、車椅子座位でも１０～１５分可能となった。

看護師の介入：ペースト食、OS１ゼリー、経管栄養で摂取していたが、看護師による経口摂取のアプローチの結果、本人の意欲が向上し、体力もついた事で離床に繋がった。

〈考察〉

OT と看護師が共通認識をもち、アプローチすることによって、離床し車椅子座位獲得の目標を達成出来た。在宅において他職種協働は不可欠であり、目標達成における重要な要素であると考える。今後も本人・家族の希望に沿って、看護師との連携を大切にし在宅生活を支えていきたい。